

周郷博講演「現代の幼児教育」

―第七十巻第四号（一九七一年四月）より―

周郷博（すこう せき）（一九〇七―一九八〇）は教育学者であり、『母と子の詩集』など小さい子どもを育てる人へ向けて詩やエッセイも書いた。今回ご紹介するのは、一九七〇年七月のお茶の水女子大学 日本幼稚園協会主催の「幼児教育講習会」における講演の一部である（周郷は当時、お茶の水女子大学教育学部教授、附属幼稚園園長）。不幸な生い立ちを生きた詩人が残した珠玉の詩を引きながら教育について論じている。

周郷自身（本誌第七十七巻第三号掲載の対談による）、中学を卒業しておらず、新聞配達をしながら夜学の電機学校に通い、電球工場や変電所などで働くうちに洗礼を受け、十五歳で関東大震災に遭うなど、多難な青年期を過ごしている。その後、独学で中学検定試験に合格、苦学して一高、そして東大に入学。賀川豊彦のセツルメントにかかわる。肋膜炎を長く患うが卒業、一九三三年文部省入省、一九四八年お茶の水女子大学に赴任。ここでは、二十一歳で逝った青年の言葉に打たれ、周郷は、教育の意味を問い、学校教育の無力さ、いやむしろ有害にさえ作用していることへの怒りをあらわにしている。

（本誌編集委員 浜口順子）

〈講演〉現代の幼児教育（一九七一（昭和四十六）年 第七十卷第四号）

周郷博

—略—

矢沢宰君の「光る砂漠」^注という詩集があります。

矢沢君というのは、四年前に二十一歳で死んでしまった人です。彼の詩や日記を読んで、八十七歳の内藤濯先生が大変興奮して、君は、えらい問題をしょっている。僕は、十数年前、「星の王子さま」とめぐりあったんだけれど、「星の王子さま」と共通した大きな問題にぶつかっているんだ」というふうな僕のところへ電話してくるんです。（中略）

矢沢君のお母さんも、死んだ宰が、先生のような人にもみてもらいなさいといっているような気がして、詩を僕のところへ送ったんだというんです。どうも僕は、子どもの時から、そういう運命をせおってきているような気がします。

今の教育というのは、全体として形だけはあるけれども精神はなくなっちゃったわけね。それは、経済成長というものの中でやっと維持されているというものです。教育の制度全体が七〇年代に役割を果たすことのできるものではないんです。制度として認められている教育ではないところで、本当の教育がおこっているということを感じます。

ルソーでも、ペスタロッチでも、フレーベルでもそうですよ。今や、世の中があまりひらけちゃって、できあがってしまったものは生命を失っているわけですから、こういう時代に、本当の教育は人の気がつかないところで、始まっているんだということを感じます。矢沢君の詩と日記は、こういうことを語っていると思います。

矢沢君は、八歳の時から腎臓結核で、ひとつ腎臓をとってしまいました。おじいさんとおばあさんが農業の仕事をしているんですけど、お父さんはやはり結核なんだな、家は貧乏で、お母さんが一人で暮しをたてていたのですけれどね。そして十三歳まで小学校にいますが、小学校の五年生までしか行っていないで、一年おかれて形だけ卒業するのです。その時は、もうひとつの腎臓もひどくなってしまっていて結核病院にかつきこまれるのです。

小学校五年生しかいっていないのに、どうしてあんなにきれいなことばが出てくるのか驚くべきことだね。それは、生まれつきというふうに考えたってその解釈にはならない。環境かといつて環境でもその説明にはならないんです。きのう自動車の中で内藤先生はうまい説明をしました。矢沢君は、自分の心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか、生まれたときからずつと、心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか。そういうふうに見えるより仕方がない。

ところが、今、ふつうの子どもたちが育つ環境はどうですか。そもそも、家庭で、一人の間になる初期の教育、たしなみという意味の教養がなされないで、人がかりでしよ、あそこの幼稚園に入れればいいのか、あそこの小学校がいいとかね。人がかりにしている所は、教育なんてない所なんです、入ってれば入ってほどよくないんです。

それまで、寝たきりでしたけど、矢沢君は十七歳の時から立てるようになりましてね、病院の中に付設されてある中学部に入って、手押車で行って、いっしょうけんめい勉強しようと思いました。そして二年で中学校を卒業して試験をうけて高等学校へ入るんです。ちょうどその頃に体の具合がたまたま少しい具合になってくるんです。それで退院して一年半、高校へ通

うんです。学校へ行くようになったら勉強がおもしろくなっちゃうんです。矢沢君の日記がここにありますが、学校というところへ入ると、勉強する気があんまりなくなってくるのね。それをね、今、幼稚園からそういうふうには、あおっているんですね。

これは、どういうことでしょうか。学校というところは、本当に勉強しようとする気持ちをこわしてしまうところなんです、知識に対する発見と、おどろきをなくしてしまうところですよ。(中略)

これは矢沢君の十五歳の時の詩なんですけど、

おれの中に／もう一人／すばらしい／人間がいて…／
そいつと／しっかり／手をむすんで／生きて／行きたい

(原文の改行部分を／で表しました——編集部)

おれの中に、もう一人すばらしい人間がいてだね、それが、サン・テグデュペリにとっては、砂漠で会った星から来た王子さまが自分の中にいるもう一人の自分なんです。だから、自分の中で対話しているわけです。しかし、十五歳の、小学校五年しか行かない子がね、そして貧乏で病気で、不幸な少年が、どうしてこういいういことばをいえるんでしょうかね。(中略)

そして、もっと前の十四歳頃に「あきらめ」という短かい詩をかいています。僕は、日本国民がいつしよにこういう決意をしなければいけないと思うのです。

あきらめてはならぬものを／あきらめて／あきらめてよいものを／あきらめず／
こんなのがわたしの／なやみのたねになっているのでしようか？

この頃に、矢沢君は、生きるという決意を本当に純粹な形でしますよ。わずかしか生きられないにしても、生きるということは意味のあることだという。そこで、生きるということとは、あきらめちやいけないということ、自分にむかっていつているわけですね。

日本国も、こういう決意をするべきじゃないでしょうか、あれも欲しい、これも欲しいじゃ、何もできないんです。何かあきらめなければ他の問題がはつきりしてこないわけですよ。経済成長も欲しいし、平和も欲しいなんてわけにはいきませんよ。お金も欲しいし、人間としての気高さも欲しいなんていったってそうはいかないよね。この矢沢君の詩は、僕らにむかって全体に語っているような気がするんですけどね。僕らの気持は、汚れちゃってますよ。その汚れを払いのけなければやるべきことがはつきりしてこないわけです。(中略)

今、新潟で洋服屋をやっている、いっしょに病院に入っていて彼の大変親しい親友になっていた人と二人で話したことが、次の長い詩になっています。僕らもこの矢沢君の詩によって教えられているのだと思いますけどね。二人で話したことです。

これからどうなるんだろう？／二人でベッドにねそべりながら考える／

高校へ行きたい／俺達は何もできないから／勉強をやっておいたほうがいい／
でも家がびんぼうでなあ……／商売をやりたい／しかしこんな体ではなあ……／

結論はなるようになるだろう?…… / そしたらそうだった所で /
一生懸命やろうと / 言う事だった

未来に対して夢はあるよ / 何かは出来ると思う / これまで生きてこられたことは /
神が俺達に何か役にたたせようと / 思つての事かもしれないから

そうかんがえれば俺達はなんの力もないようだが /
どうにかして生きていけないこともないように / 思うなあ

僕は、この中で「そしたら、そうだった所で一生懸命やろうと言うことだった」というところは非常によくわかるんですけどね。初めから東大へ入ろうとかさ、人よりも先に走つてた方がいいとか、はじめから未来をしばつておいやいけないんですよ。未来は解放しておかなければいけないですよ。「そしたら、そうだった所で一生懸命やろう」という十六歳の二人の少年の心は実に美しいと思いますよ。(中略)

幼児教育とか、これからの教育を考える時、本当に知るといふことは何でしょうか。知るといふことは、ものをたべることよりも、もつとはりあいのあることでしょ。発見のおどろきがあるわけですよ。知るといふことと、生きるということが、所有すること以上に、人間にとって生きがいでなきやならないような時代が来なければ地球は滅びちゃうんです。——略——

注 矢沢幸詩 / 周郷博編『光る砂漠』童心社 一九六九年